

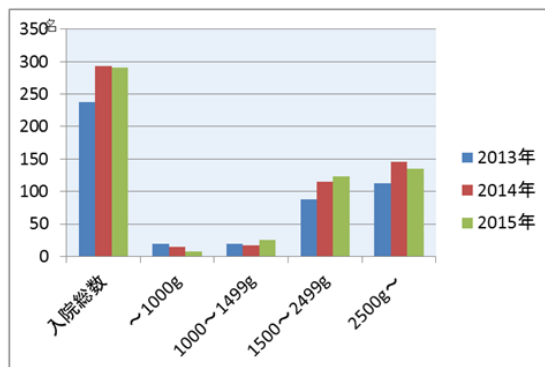
周産期母子医療センター(新生児部門)の活動報告 ～地域産科との連携～

小児科医長 山本 順子
(NICU担当) Yamamoto Junko

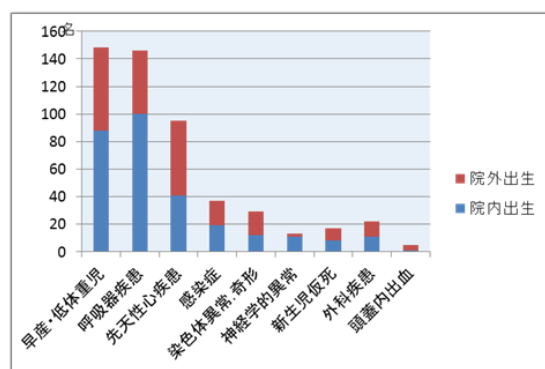
当院新生児病棟は産婦人科病棟（4南）とともに診療体制を整え、周産期母子医療センターとしての役割を担っています。センター内の新生児を扱う病棟はNICU（新生児集中治療室）とGCU（回復期治療室）からなり、2014年4月からはNICUが12床から15床に増床し計31床で、県内12ある周産期センターの中で4番目に多い、市内では最も多い病床数です。

それでは、当院周産期母子医療センターの活動内容を紹介していきましょう。

1. A) 年間総入院数（2013-2015年）の内訳(体重別)



B) 主な疾患別入院数（2015年度） *重複あり



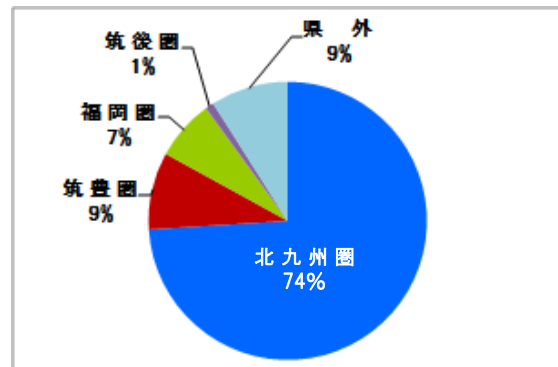
出生体重2,500g未満の低出生体重児の占める割合が約5割です。

また疾患別では早産や低出生体重児、呼吸器疾

患の次に先天性心疾患が多いのが当施設の特徴です。

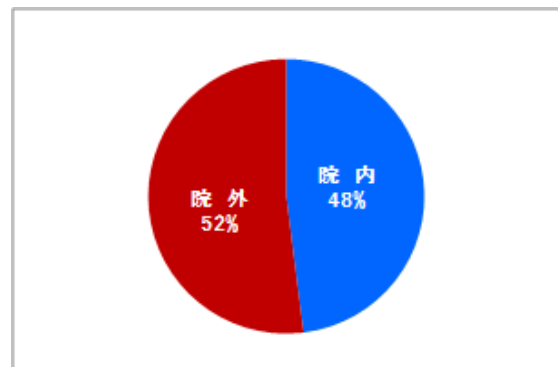
県内外から心疾患の治療のため搬送されてきています。

2. 入院児の地域別分類



74%が北九州圏（北九州市、中間市、遠賀郡、行橋市、豊前市、京都郡、築上郡）の入院ですが、県外からの入院も9%と比較的多いのが特徴です。これはやはり心疾患の児の転院が多いためです。

3. 入院児の院内・院外出生の割合



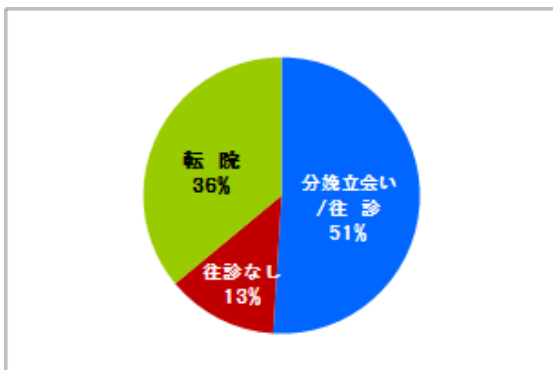
院内出生、院外出生の割合が、ほぼ半数ずつです。県内の周産期母子医療センターのなかで、これほど院外出生児を最初から診ている施設はありません。

当院では、緊急母体搬送や胎児診断された症例

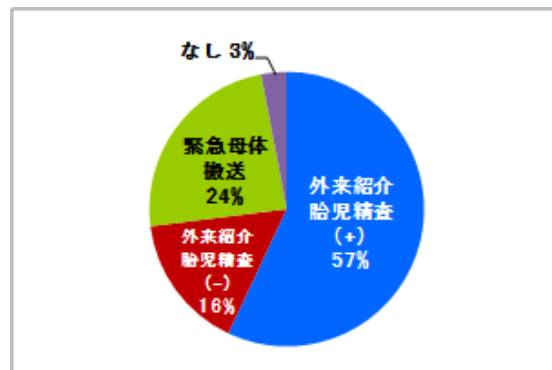
などの計画分娩が必要な児については院内出生とする一方、近隣産科において、予測不能な分娩時あるいは出生後におこる児の問題に対しても早急に対応するシステムを整えています。

他施設からの転院の割合も多く、最も多いのは心疾患の管理（手術を含む）で、その他、血液浄化療法、新生児外科手術目的などがあげられます。

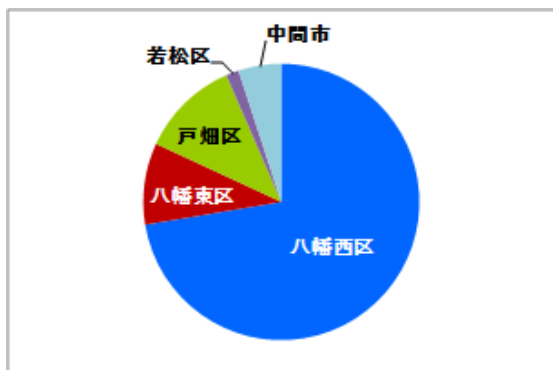
4. A) 院外出生児の分娩立会い・往診の状況



5. A) 院内出生児の産科紹介の内訳



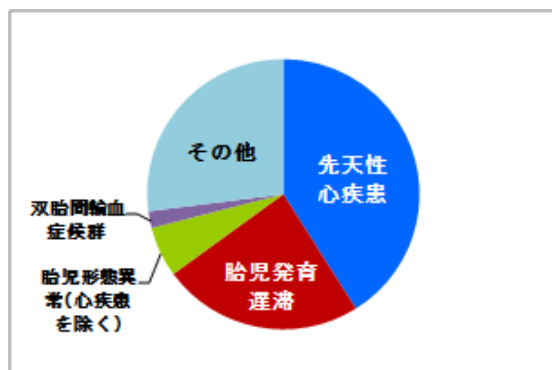
B) 近隣産科への分娩立会い・往診の地域別内訳



院内出生の児は、ほぼhigh riskの症例に特化できているといえます。

胎児エコーの発達とともに胎児精査目的の症例が多く（57%）、切迫早産や胎児モニタリング異常などが理由の緊急母体搬送も多い（24%）です。

B) 胎児精査の目的



心疾患と胎児発育遅滞が多く、続いて形態異常が続きます。

胎児形態異常の症例では、当小児科医も胎児エコー検査に立ち会い、産科医師と協議しながら

その院外出生児の入院ですが、他施設からの転院を除けば、84%が当科医師が近隣産科に出向き、出生時の蘇生が必要となる可能性のある分娩の立会いや往診後に当院に救急搬送しています。八幡西区をはじめ、八幡東区、戸畑区、若松区、中間市の近隣産科への分娩立会い/往診を24時間体制でおこなっています。

また図には示していませんが、入院にならなかった児（分娩立会いや往診のみ）も昨年度は15件ありました。

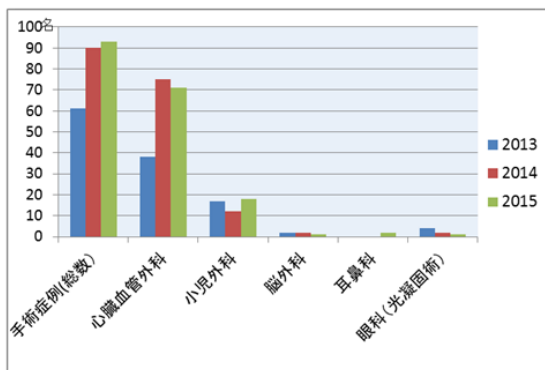
小児科

周産期母子医療センター(新生児部門)の活動報告 ～地域産科との連携～

病診連携

方針を立てていきます。

6. 手術症例の内訳



新生児の手術症例数は県内周産期母子医療センターのなかで最も多く、特に先天性心疾患に対する手術(心臓血管外科)が多くを占めています。また八幡地区の新生児外科疾患(小児外科)は当院に搬送されてきています。

7. その他の活動

〈新生児蘇生法(NCPR):「専門」コース、「一次」コースの開催〉

当院にはNCPRのインストラクターが3名おり、院内外で定期的に資格講習を開催しています。

医師、助産師・看護師、看護学生を対象にこれまでに約100名の方が受講されました。

おわりに

以上のように、当新生児病棟は他の周産期施設とは異なった特徴をもっており、「地域に根差した」施設であるとともに、「県内外の広域もカバーし多岐にわたる新生児疾患に対し高度な医療を提供できる」施設として、今後も院内外の産科や小児科と連携して万全なサポート体制を維持していきたいと考えています。

